

vRealize Automation 8.2 リリース ノート

Updated on 07/13/2021

vRealize Automation 8.2 | 更新日 : 2021 年 5 月 5 日

- vRA Easy Installer (ISO) ビルド 16982088
- vRA 製品 (アプライアンス) ビルド 16980951
- vRA アップデート リポジトリ ビルド 17018654

各リリース ノートで、追加または更新された情報をご確認ください。

リリース ノートの概要

- [vRealize Automation 8.2 について](#)
- [新機能](#)
- [はじめに](#)
- [既知の問題](#)

New : vRealize Automation 8.2 Patch 1

vRealize Automation 8.2 Patch 1 が利用可能になりました。さまざまな領域におけるバグの修正が含まれています。これは累積アップデートです。

詳細とインストール方法については、ナレッジベースの記事 [KB81396](#) を参照してください。

vRealize Automation 8.2 について

vRealize Automation 8.2 では、vRealize Automation 8.1 の機能が強化され、機能面では vRA 7.x リリースに近くなりました。XaaS などの主要な機能を再度導入し、AWS GovCloud のサポート、ABX での PowerShell のサポート、vRO での Python、Node.js、PowerShell のサポートを追加しました。

必須 : vRealize Automation 8.2 にアップグレードする前に、vRealize Suite Lifecycle Manager 8.2 に製品サポート パック 1 を適用する必要があります。vRealize Suite Lifecycle Manager 製品サポート パック 1 は、vRealize Network Insight 6.0.0 向けの累積サポート パックです。このサポート パックでは、vRealize Automation 8.2 アップグレードバンドルと、vRealize Automation アップグレード OVA ファイルもサポートされます。これは、vRealize Automation 8.1 以前のバージョンから vRealize Automation 8.2 へのアップグレード後に行う vRealize Automation 8.2 のスケールアウトに必要で

す。ナレッジベースの記事 [KB79105](#) を参照して、vRealize Suite Lifecycle Manager のユーザー インターフェイスに表示されるパッチ適用済みの製品バイナリから、vRealize Automation 8.2 アップグレード OVA のバンドルバイナリをマッピングします。

アップグレードの前に、必要な[システム リソース](#)を確認し、システムがこれらの要件を満たしていることを確認します。

展開サービスで、カタログ API、展開 API、およびポリシー API の新しいバージョンがリリースされました。API のバージョンの互換性を必ず確認してください。

注：vRealize Automation 8.1 では、移行評価中に移行元の証明書を受け入れる必要がありませんでした。そのため、移行元の環境を再評価する必要があります。移行元の環境を再評価し、ソース証明書を受け入れるには、移行元の環境を削除して再度追加し、証明書を受け入れ、移行アシスタント サービスを使用して移行元の環境を再評価します。

新機能

vRealize Automation 8.2 には多くの新しいメリットがあります。

新しいバージョンの vRealize Automation REST API

vRealize Automation REST API の新しいバージョンは、すべての vRealize Automation リリースで利用できます。新しいバージョンでは、展開ごとに 300 リソースがサポートされるようになり、パフォーマンスが向上しています。API を以前のバージョンにロックしていない API ユーザーの場合、API 応答に予期しない変更が発生することがあります。ベスト プラクティスとして、**apiVersion** 変数を割り当て、API を目的のバージョンにロックすることを推奨します。例：

- API を vRealize Automation 8.1 API にロックするには、**apiVersion=2020-04-16** を使用します。
- API を vRealize Automation 8.2 API にロックするには、**apiVersion=2020-10-06** を使用します。

ロックしない場合、API 要求はデフォルトで最新のバージョンになります (**apiVersion = 2020-10-06**)。

API を特定のバージョンにロックする方法については、[vRealize Automation 8.2 API プログラミング ガイド](#)の「API Versioning」セクションを参照してください。

注：vRealize Orchestrator REST API は、apiVersion パラメータをサポートしておらず、後方互換性があります。

vRealize Automation ブループリントの名称を VMware Cloud Templates に変更

- ブループリントは、VMware Cloud Templates に名称が変更されました。[詳細情報](#)。
- 公式ドキュメント、API、エラーメッセージ、およびその他のコード領域で、「ブループリント」という用語がまだ記載されている場合があります。

VMware vRealize Automation 8.2 には、製品内ユーザー サポートが含まれています。

- 設定について調べるには、Signpost のヘルプを使用します。
- 機能または設定プロセスの詳細を調べるには、ヘルプ パネルを使用します。

移行アシスタントが使用可能

ユーザーがコンテンツと展開を vRA 7.4/7.5/7.6 インスタンスから vRA 8.2 インスタンスに移行できるように、移行評価サービスの機能が拡張されました。

- インフラストラクチャ、サブスクリプション、および展開の移行
- 移行のロールバック
- vRA 7.x システム全体を一度に移行せず、各ビジネス グループを段階的に移行

制限： vRealize Automation 8 移行アシスタントでは、外部の vRealize Orchestrator インスタンスを使用した移行はサポートされません。

vRealize Automation で Terraform 構成を VMware Cloud Templates リソースとして利用可能

Terraform のオープン ソース構成が、VMware Cloud Templates で、統合の形でサポートされるようになりました。クラウド管理者は、Git に保存されている Terraform 構成を統合して、セルフサービスのカタログアイテムとしてリリースすることができます。次のような機能を選択できます。[詳細情報](#)

- Terraform 構成を使用したクラウドテンプレートの作成
- ハイブリッド Terraform-VMware Cloud Templates の作成
- Terraform リソースで組み込みの Day 2 電源アクションとカスタムの Day 2 アクションの有効化
- 集中管理の展開状態ファイル
- クラウド上の管理対象 Terraform ランタイム
- DevOps ユーザー向けの Terraform ベースのクラウドテンプレートを展開する Code Stream パイプライン

SDDC Manager 統合と VMware Cloud Foundation (VCF) クラウドアカウント

SDDC Manager 統合を構成し、ワークロード ドメインを VMware Cloud Foundation (VCF) クラウド アカウントとして VMware Cloud Assembly サービスにオンボーディングします。VCF クラウド アカウントを使用すると、VCF ワークロードを Cloud Assembly に組み込んで、ハイブリッドクラウド管理ソリューションを包括的に効率化することができます。

1. SDDC Manager は、1 つ以上のワークロード ドメインを VCF クラウド アカウントとしてオンボードする際に 1 回限りの統合エンドポイントとして使用できます。
2. VCF クラウド アカウントにより、新しいリソースのプロビジョニング時に、vRealize Automation でコンピューティング リソースとネットワーク リソース (vSphere および NSX-T) の両方が利用可能になります。
3. VCF クラウド アカウントでは、サービス認証情報がサポートされており、vSphere で使用する新しいサービス アカウントを自動的に作成したり、SDDC Manager から既存の NSX 認証情報を再利用したりできます。
4. フレーバー、イメージ、ネットワーク、およびストレージプロファイルは、vSphere クラウド アカウントや VMC クラウド アカウントと同様に VCF クラウド アカウントに対しても定義できます。
5. vSphere/NSX の固有/非依存のリソースを、VCF クラウド アカウントへの新しいリソースのプロビジョニングを指定する制約とともに使用することができます。

マルチテナント：テナント インフラストラクチャの集中管理

仮想プライベートゾーンをセットアップおよび管理し、テナントの分離を維持しながらプロジェクト間で IaaS リソースを共有します。マネージドサービス プロバイダでは、共有インフラストラクチャ マルチテナントによってリソースの割り当てと管理が最適化されます。この機能により、プロバイダは、自身で管理するインフラストラクチャをテナントに割り当てることができます。これは現在、VMware Cloud Provider Hub を介したマルチテナント構成のプロバイダ組織に限定してサポートされます。[詳細情報](#)。

1. プロバイダ管理者は、仮想プライベートゾーン (VPZ) と呼ばれる隔離された IaaS リソース (コンピューティング、ネットワーク、ストレージ、イメージ、フレーバー) のバンドルを作成します。すべての CRUD 操作がサポートされます。
2. プロバイダ管理者は、VPZ をテナントと共有します。
3. 同様に、テナント管理者は VPZ をテナント組織内のプロジェクトと共有します。1 つのプロジェクトに複数の VPZ を追加できることに注意してください。
4. テナントプロジェクトメンバーは、VPZ にマシンをプロビジョニングできます。
5. プロジェクトメンバーは展開を表示して、基盤となるインフラストラクチャの「難読化」されたビューを表示します (VPZ 名のみ)。

6. テナント A のリソースは、基盤となるインフラストラクチャが共有されていても、テナント B には表示されません。

カスタムのロールベースのアクセス コントロール (RBAC)

vRealize Automation 8.2 で導入しているカスタムのロールベースのアクセスでは、ユーザーがサービス利用者とプロバイダに割り当てたロールを、組織内で保持している実際のロールと密接に連携させることができます。これにより、不要なタスクや組織のセキュリティに関連した権限の負担を考慮せずに、ユーザーが資格を付与された実際のタスク（権限）と資格を付与されたリソースに基づき、ロールを厳密に構成することができます。

基本概念：

- 組織管理者は組織内のカスタム ロールを定義することができます。
- 各カスタム ロールは、組織のユーザー/グループに割り当てることができます。
- 新しいカスタム ロール モデルは、設定不要のロールと統合し、組織内のアクセス コントロールおよびポリシーと連携して機能します。

使用可能な設定可能権限：

- イメージ、フレーバー、ゾーン、マシンと要求、クラウドアカウント、クラウドゾーン、プロジェクトに対するカスタム ロール
- オンボーディング プランを管理および表示するカスタム ロール
- 拡張性ユースケースのためのカスタム ロール：
 - 管理および表示
 - アクションの実行
 - アクション
 - サブスクリプション
 - 以下に対する閲覧者権限：
 - イベント
 - イベント トピック
 - ワークフロー
 - ワークフローの実行
- クラウドテンプレートを管理および表示するカスタム ロール
- 組み込みおよびカスタム リソースに対するカスタム Day 2 アクションを管理および表示するカスタム ロール
- パイプラインのモデリング、実行、構成のためのカスタム ロール
- ポリシー権限のカスタム ロール

- 承認のための権限を管理するカスタム ロール

詳細については、[カスタム ロール](#)および[他のロールとの連携方法の例](#)を参照してください。

XaaS カスタム リソースとカスタム アクションの機能強化

- Custom Resources Schema Dynamic データのサポート。vRealize Automation 8.2 には、カスタム アクションにライフサイクルアクションとして追加されたワークフローの自動検証機能が含まれるようになりました。この機能には、外部タイププロパティとカスタム リソースのプロパティ スキーマへの強化も含まれています。[詳細情報](#)。
- カスタムの Day 2 アクションのバインド。vRealize Automation 8.2 では、要求内、バインドアクションの使用、直接バインドの 3 タイプのアクションバインドをサポートしています。[詳細情報](#)。

NSX-T Manager と vCenter Server の間で 1 対多の関連付けをサポート

1 つの NSX-T Manager の複数の vCenter Server への接続をサポートします。[詳細情報](#)。

NSX-T ポリシー モードのサポート

- ポリシー モードでの新しい NSX-T エンドポイントの作成を有効にしました。[詳細情報](#)。
- ネットワーク (Day 0、Day 2)、ロードバランサ (Day 0)、セキュリティ グループ (Day 0)、タグ付け (Day 0)、仮想マシンのスケール イン/スケールアウト (Day 2)、ポート転送 (Day 0、Day 2) でのポリシー モードのサポート。

NSX ロード バランサの構成 - ログ レベル、アルゴリズム、タイプ、NIC、仮想 IP アドレス

- ログ レベル、アルゴリズム、タイプ (Day 0、Day 2) などの NSX ロード バランサの高度な構成をサポートします。[詳細情報](#)。
- プライベート ネットワーク、既存のネットワーク、パブリック ネットワーク、送信ネットワーク、ルーティング ネットワークなど、すべてのネットワーク タイプで NIC の NSX ロード バランサ構成オプションをサポートします。ロードバランサでは、デフォルトでマシンの最初の NIC を常に使用するのではなく、指定のマシン NIC に接続できるようになりました。
- クラウドテンプレートで IPv4 仮想 IP アドレス (VIP) を指定できるようになりました。これにより、固定 IP アドレス範囲内の IP アドレスではなく、特定の IP アドレスをロードバランサで使用できるようになります。

NSX ポート転送

- NSX の送信ネットワークでのポート転送（DNAT ルール）のサポート。vRealize Automation では、新しいクラウドテンプレート リソース タイプ Cloud.NSX.Gateway が公開されます。これにより、送信ネットワークに接続されているゲートウェイ/ルーターには DNAT ルールを指定できるようになります。[詳細情報](#)。
- Day 2 アクションで、NAT ポート転送ルールの新規追加、ルールの順序変更、既存ルールの編集、ルールの削除がサポートされます。

ネットワークの Day 2 アクション - セキュリティ グループの再構成

- セキュリティ グループの再構成：
 - セキュリティ グループの変更：新規または既存のセキュリティ グループの追加、関連付けられたセキュリティ グループの削除、関連付けられたセキュリティ グループの変更。Day 2 アクションの際に、セキュリティ グループが展開の一部になります。Day 2 アクションは、単一のマシンに対してのみサポートされます。複数のマシンからなるクラスタではサポートされません。
 - セキュリティ グループの削除：展開からのセキュリティ グループの削除。セキュリティ グループがオンデマンドの場合は破棄されます。
- ネットワーク間での仮想マシンの移動：
 - vSphere マシン NIC の展開の制約を更新して、同一のネットワーク プロファイル内の既存のネットワークから別の既存のネットワークに移動することができます。
 - マシンを静的なネットワーク同士、または動的なネットワーク同士の間で移動することができます。
 - 以前のネットワークは展開から削除されます。[詳細情報](#)。

vSphere 7 スーパーバイザー名前空間をカタログアイテムとして使用

- カatalog ユーザーが、基盤となる VMware クラウドテンプレートによって提供された vRealize Automation カatalog から vSphere スーパーバイザー名前空間を申請する機能。
- クラウドテンプレートの作成者は、クラウドテンプレート リソースに対するスーパーバイザー名前空間のリソース制限を定義できます。これにより、管理者はユーザーのリソース使用を制限できます。

ITSM Plug-in 8.1.2

- vRealize Automation 用の新しい ITSM プラグイン（バージョン 8.1.2）が、[ServiceNow Store](#) から入手できるようになりました。
- Orlando のサポート – プラグインで最新の ServiceNow バージョンである Orlando をサポートします。以前の ServiceNow バージョンである Madrid と New York もサポートしています。
- ユーザー ポータルでのカスタム フォームのサポート
- 複数レベルの承認 –ServiceNow 管理者は、ServiceNow カタログ申請に複数レベルの承認を構成できます。
- E メール通知 –ServiceNow 管理者は、展開申請、承認申請、Day 2 申請、エンドポイントおよび資格の構成など、さまざまなアクティビティに E メール通知を構成できます。
- 失敗した展開に対するチケットの自動作成 –vRealize Automation で展開申請が失敗した場合、または Day 2 アクションが失敗した場合、ServiceNow のサポート グループにサポート チケットが作成され、割り当てられます。

vRealize Automation のスケーリング

- 展開あたり最大 250 のリソースと 40 万台の仮想マシン。
- 展開に 100 以上のリソースを含む場合は、新しい API バージョン 2020-08-25 にアップグレードします。

First Class Disk および IaaS API

- 仮想マシンを使用せずに First Class Disk (FCD) ディスク オブジェクトを個別に作成できます。CRUDL 機能（作成、編集、削除、リスト）を完全にサポート
- Day 2 アクションとディスク スナップショット ライフ サイクル管理をサポート
- FCD の作成、削除、リスト、接続、および接続解除を行う IaaS API。
- 既存のディスクを FCD に変換する IaaS API。 [詳細情報](#)。
- FCD のスナップショット管理用の IaaS API（作成、削除、リスト、およびリストア）。

拡張性サブスクリプション

イベント トピックあたり最大 50 のブロック サブスクリプションと 50 の非ブロック サブスクリプションをサポートします。 [詳細情報](#)

Service Broker、オンボーディングされた展開、および Cloud Assembly 展開でのカタログアイテムに対する承認

- CloudFormation テンプレート、vRO ワークフロー、ABX アクション、OVA などを含む Cloud Assembly クラウド テンプレートに加え、すべてのカタログ アイテムに承認が適用されるようになりました。
- クラウド アカウント、クラウド タイプ、フレーバー、イメージ、リージョン、またはリソース タイプ別にフィルタリングした、基盤となるリソースの属性に基づいて承認ポリシーをトリガできます。[詳細情報](#)
- Cloud Assembly ブループリント展開でのプロビジョニング前および Day 2 アクションの承認フローをサポート
- インポートした展開での Day 2 アクションの承認フローのサポート
- [承認ポリシーの詳細情報](#)

承認の詳細での申請フォームの表示

承認者は、申請者が承認の申請中に送信した入力パラメータを確認できるようになりました。このビューの強化により、承認者は、申請の発信者が提出したのと同じ情報に基づいて承認決定を下すことができます。

vROps との統合

ユーザーが vRA クラウドと vROps クラウドの両方をサブスクライブすると、統合は自動的に構成され、次のような利点が得られます。

- vROps ポリシーに基づく高度なワークロード配置のサポート。
- VMware Cloud のリソース、展開、およびプロジェクトの価格設定。
- VMware Cloud のインフラストラクチャの健全性およびパフォーマンスのメトリック。[詳細情報](#)

IaaS API を使用してクラウドアカウントの特定のリージョン内のリソースをフィルタリング

Cloud Assembly IaaS API のリソースは、データ フィルタを使用することで属しているリージョン別に検出されます。リージョンは、externalRegionId と、対応する cloudAccountId によって一意に識別されます

クラウドアカウントのパスワードを更新するための API

IaaS API を使用して vSphere と NSX のクラウドアカウントのパスワードを更新します。

Bitbucket 統合のサポート

ABX アクション スクリプトと VMware Cloud Templates の Git ベースのリポジトリとして使用するオンプレミスの Bitbucket との統合がサポートされます。

Active Directory 統合の強化

- Active Directory の検証段階では、ベース DN 検索はコンテナのみに制限されていました。
- 一部のユーザーは、一部の Active Directory API が [プロジェクト] 画面または [統合] 画面にロードされなくなる原因である広告ブロッカーの影響を受けていました。これらの API は、広告ブロッカーとシームレスに連携するように調整されました。
- Active Directory 統合では、プロジェクトの名前変更がプロジェクトの関連付けに反映されるようになりました。

API によるカスタム プロパティの更新

マシンのカスタム プロパティは IaaS API を使用して更新されます。

vRA のログ保持期間の強化

オンプレミスのログ インフラストラクチャは、次のように強化されました。

- 各サービスのログ保持期間は 7 日間
- ストレージ容量を確保するためにサービス ログを個別のパーティションに配置
- Kubernetes がダウンしてもログを収集できるように Kubernetes レイヤーからログ インフラストラクチャを抽出

カスタム Day 2 アクション

カスタム リソースと vRealize Automation 組み込みタイプに対するカスタム Day 2 操作。 [詳細情報](#)

カスタム リソース

vRO タイプに基づくカスタム リソースのサポート。 [詳細情報](#)

展開履歴

削除した展開履歴を、削除後最大 90 日間表示およびフィルタリングすることが可能です。 [詳細情報](#)

プロジェクト間での ABX の共有

複数のプロジェクト間で単一のアクション ベースの拡張性を共有する機能。 [詳細情報](#)

oData クエリ内でのスペース記号のダブルエンコードは不要

IaaS API oData クエリの URL エンコードの動作は、Google などの最新のインターネット検索エンジンと整合性を持つようになりました。この変更が行われる前は、特殊記号 (%2520 や +) にダブルエンコードが必要でした。現在は、スペース記号をダブルエンコードする必要がなくなりました。

例：

以前使用していたクエリ： {{url-

home}}/iaas/api/machines?\$filter=externalRegionId%2520eq%2520%27Datacenter%3Adatacenter-21%27

変更後のクエリ： {{url-

home}}/iaas/api/machines?\$filter=externalRegionId%20eq%20%27Datacenter%3Adatacenter-21%27

制限事項：

「記号」を検索する場合は、引用符を追加してその記号をエスケープする必要があります。

「&」記号の検索 - CloudAccounts に対する oData クエリではサポートされていません。

「%」記号の検索 - すべてのエンドポイントでサポートされていません。

Service Broker のカスタム フォーム

ワークフローが Service Broker にインポートされ、プロパティと複合タイプを有効にする前にカスタム フォームが有効になっており、対応するアレイが実装されている場合は、カスタム フォームを削除し、ワークフローを Service Broker に再度インポートすることでフォームの要素を修正する必要があります。

VMware vRealize Automation SaltStack Config を使用した構成管理

VMware vRealize Automation SaltStack Config（旧称 SaltStack Enterprise）は、定義された状態に仮想マシンを維持する構成管理システムです。vRealize Automation 8.2 リリースでは、SaltStack Config の追加により、特定のパッケージが確実にインストールされるようになり、また、定義された状態からの逸脱に迅速に対処できるようになりました。また、SaltStack Config を使用すると、個々の仮想マシンまたは仮想マシンのグループに対して大規模かつ迅速にクエリおよびコマンドを実行することができます。製品のインストールと使用については、[vRealize Automation 8.2 製品ドキュメント](#)の「SaltStack Config」セクションを参照してください。

はじめに

サポート ドキュメントで製品について理解しておく必要があります。

- [vRealize Easy Installer を使用した vRealize Automation のインストール](#)
- [vRealize Automation でのユーザーの管理](#)
- [vRealize Automation 移行ガイド](#)

vRealize Automation をインストールしてユーザーを設定した後、含まれている各サービスについて、[スタート ガイド](#)と[使用と管理ガイド](#)を参照できます。スタート ガイドでは、エンドツーエンドの事前検証について説明しています。使用と管理ガイドでは、使用可能な機能の検証をサポートする詳細な情報を提供しています。[vRealize Automation 8.2 の製品ドキュメント](#)には、その他の情報も記載されています。

- [vRealize Automation Cloud Assembly スタート ガイド](#)

- [vRealize Automation Cloud Assembly の使用と管理](#)

- [vRealize Automation Code Stream スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Code Stream の使用と管理](#)

- [vRealize Automation Service Broker スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Service Broker の使用と管理](#)

New : 次のチュートリアルは、Cloud Assembly のドキュメントに含まれています。

- vSphere クラウドアカウントを追加し、クラウドゾーンを定義して、ユーザーをプロジェクトに追加し、VMware Cloud Templates を使用してワークロードを設計および展開する手順については、「[vSphere インフラストラクチャおよび展開環境のセットアップとテスト](#)」を参照してください。
- マシン名のカスタマイズ、Active Directory レコードの作成、DNS と IP アドレスの設定など、すべての管理者が展開処理の一部として行う基本的な構成を使用するには、「[本番ワークロードの構成とプロビジョニング](#)」を参照してください。

vRealize Orchestrator 8.2 の機能と制限事項については、「[vRealize Orchestrator 8.2 リリース ノート](#)」を参照してください。

VMware では、多様性の受け入れを尊重しています。この原則をお客様、パートナー、社内コミュニティ内で共有するために、当社では当社ドキュメント内の多様性の受け入れにふさわしくない言葉遣いを削除しました。

新しいアップグレードバンドルを使用して vRealize Automation 8.2 にアップグレードした場合、スケールアウト時にエラーが表示されることがあります（パッチ適用環境と同様）。[KB79105](#) に記載されているように、ova バンドルは my.vmware.com でホストされています。

New : VMware Identity Manager 3.3.3 を vRealize Automation 8.2 P1 とともに使用している場合、組み込みの Linux コネクタで IWA（統合 Windows 認証）を使用することはできません。外部 Windows コネクタで LDAP または IWA を使用している vRA 8.x のユーザーは、影響を受けません。詳細については、ナレッジベースの記事 [KB82013](#) を参照してください。

解決した問題

- バインド値を正しく解決できないため、特定のネットワーク プロパティへのプロパティ バインドを含むブループリントが展開に失敗する

dns、**dnsSearchDomains** および **gateway** プロパティのプロパティ バインドが機能していません。これらは主に OVF ブループリントで使用されます。

回避策：次のプロパティを使用するブループリントは、別のプロパティ セットを使用するように変更する必要があります。

注：この問題に対する永続的な修正は、vRA 8.1 の最初の修正プログラムで提供されます。ここに記載されている回避策は一時的なものであり、修正プログラムを適用した後に元に戻す必要があります。

dns プロパティの場合：

```
dns0: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.dns[0]}'
```

```
dns1: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.dns[1]}'
```

を以下に変更する必要があります。

```
dns0: '${replace(split(resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsServerAddresses, ","), "[0]", "[", ""]}'
```

```
dns1: '${replace(split(resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsServerAddresses, ","), "[1]", "[", ""]}'
```

dnsSearchDomain プロパティの場合：

```
dnsSearchDomain0: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsSearchDomains[0]}'
```

```
dnsSearchDomain1: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsSearchDomains[1]}'
```

を以下に変更する必要があります。

dnsSearchDomain0:

```
'${replace(split(resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsSearchDomains, ","), "[0]", "[", ""]}'
```

dnsSearchDomain1:

```
'${replace(split(resource.Cloud_NSX_Network_1.dnsSearchDomains, ","), "[1]", "[", ""]}'
```

gateway プロパティの場合：

```
gateway: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.gateway}'
```

を以下に変更する必要があります。

```
gateway: '${resource.Cloud_NSX_Network_1.gatewayAddress}'
```

- ノードの CPU 使用率が 100% になると、ポッドのクラッシュが始まる

高負荷の環境でログバンドルを生成すると、1 台以上のノードで CPU やメモリの使用率が一時的に過負荷になる可能性があります。これにより、サービスがクラッシュする場合があります。

回避策：環境に負荷が少ないときに、ログバンドルの収集スクリプトを実行します。外部ログソリューション（vRLI または Syslog サーバ）へのログの転送を設定および監視します。

- データ収集でストレージポリシーの収集に失敗し、互換性のあるデータストアまたは vCenter Server 7.0 での既存のストレージポリシーの更新に失敗する。データ収集で vRA での WCP の可用性の更新に失敗する

vSphere クラウドアカウントに複数のデータセンターがあり、それらが vRA のエンドポイントで選択されていない場合、データ収集の完了に失敗し、データ収集が部分的に成功して、上記の症状が発生する可能性があります。

回避策：vSphere クラウドアカウントのすべてのデータセンター（リージョン）を選択します。そのデータセンターを管理しない場合は、クラウドゾーンを作成する必要はありません。ただし、データセンターのアーティファクトが収集されます。

- vSphere 組み込みタイプでのカスタム Day 2 アクションのバインドは手動で参照する必要があります

vRA 7.x では、カスタム Day 2 アクションとコンテキスト内の vRA 組み込みオブジェクトのバインドの自動化がありました。vRA 8.1 では、このバインドは vRO アクションによって行う必要があります。

公式のドキュメントでバインドプロセスに関する詳細なガイダンスを確認できます。

- 展開にリソースが不足しているときに、ユーザーがプランの生成のブループリントを適用することによってその展開を更新しようとする、「展開で別の要求がすでに進行中です」というエラーメッセージが表示されることがある

さらに、展開履歴のタイムラインに別途「Day 2 アクション - 削除」が表示されます。また、ユーザーが API を介して展開を更新すると、「展開で別の要求が進行中です」と表示されます。

展開の更新を再試行します。

- ドロップダウンから入力するアクションがある vRO ワークフローを XaaS カタログアイテムとしてインポートすると、選択可能な値が静的な定数としてインポートされる

ドロップダウンから入力するアクションがある vRO ワークフローを XaaS カタログアイテムとしてインポートすると、選択可能な値が静的な定数としてインポートされます。

これにより、カタログアイテムの申請を使用する際に、フィールドに値が動的に入力されるのではなく、静的な値が表示されます。

このようなカタログアイテムの場合、カスタム フォームを使用して「外部ソース」と参照アクションを手動で選択することで、値が適切に入力されます。

- アプライアンスが 172.17.x.x ネットワークに展開されている場合、vRA 8.1 の展開またはアップグレードが失敗する

vRA の展開が失敗します。「組み込みの vRO の登録」ステージで deploy.sh スクリプトの実行に失敗します。

/var/log/deploy.log には次が記録されます。

```
curl: (22) The requested URL returned error: 400 Bad Request
Failed to register vRO.Will retry in 45 seconds...
```

...

```
curl: (22) The requested URL returned error: 400 Bad Request
Maximum number of retries exceeded."
```

原因：アプライアンスは、172.17.x.x 空間から IP アドレスを取得しました。これは、vRO ポッドからの内部 *docker0* インターフェイスと競合しています。

<https://kb.vmware.com/s/article/78783> を参照

- ロードバランサのリストを名前でフィルタリングすると、vRA で展開した同一の NSX ロードバランサが、1 つは「展開済み」、もう 1 つは「検出済み」という異なる名前で 2 つ表示される

vRA で NSX ロード バランサを展開すると、ロード バランサは、vRA が内部データベースで
使用しているものとは異なる ID および名前を使用して NSX に作成されます。結果として、
vRA は最初に作成されたロード バランサ レコードを更新せず、関連付けられた NSX クラウ
ド アカウントをデータ収集する際には重複した新しいロード バランサ レコードを作成して
から更新を実行します。これにより、ロード バランサがリストされる画面では、ロード バ
ランサが重複しているように表示されます。

回避策：vRA で展開した NSX ロード バランサをネットワーク プロファイルに追加する際
に、「検出済み」ではなく、「展開済み」のロード バランサを選択します。

- **Ansible 統合用の「useSudo」オプションを更新できない**

ユーザーは、ユーザー インターフェイスで Ansible 統合アカウントの「useSudo」オプショ
ンを編集することはできません。

- **Ansible Playbook の実行が正常に完了しても、不明なエラーがランダムに発生する**

Ansible Playbook のステータスのチェック時に、プロキシへの SSH 接続が過負荷のために失
敗することがあります。接続が失敗した場合、ランダム エラーを回避するために再試行メ
カニズムが導入されます。

- **Ansible インベントリの更新が、「インベントリ内に IP アドレスが見つかりません」という
エラーを表示して失敗する**

実行の競合が発生すると、インベントリ ファイルが適切に更新されず、インベントリにホ
ストが見つからないためエラーが発生する可能性があります。

既知の問題

このリリースには、次の既知の問題があります。

- **Easy Installer からの新規セットアップ時に vRA の展開の初期化に失敗する**

Easy Installer または vRealize Suite LCM からの新規セットアップ時に、vRA の展開（単一またはクラスタ）に失敗します。

LCM に表示されるエラーは LCMVRAVAVACONFIG590003 です。

回避策：vRealize Suite LCM 内からクラスタの初期化を再試行します。

- **vCenter Server** クラウドアカウントが更新されてデータセンターが追加された場合、このデータセンターのリソースをただちに使用できない

vCenter Server クラウドアカウントのリージョン（データセンター）に加えられた変更はただちに反映されないため、データ収集の実行が必要です。

回避策：次のデータ収集が正常に完了するまで待機します。データ収集は約 10 分ごとに実行されます。

- **PowerShell** タスクが停止しているように表示される

アクティブなセッションがない場合、PowerShell タスクが停止しているように表示されます。この動作は、ユーザー スクリプトを実行する PowerShell プロセスが Windows システム プロセス WmiPrvSE によって保持されているために発生します。

回避策：システムにログインし、アクティブなセッションを維持します。完全にログアウトするのではなく、画面をロックします。

- **vRO** が、配列型を「**type.isMultiple**」が **true** のフィールドではなく、1 つの列のみの複合型として表す

配列入力を含むワークフローを追加してそのフォームをカスタマイズする場合は、データグリッドの [値] タブで列の ID を変更しないでください。デフォルト値は、**_column-0_** の設定のままにしておく必要があります。一方、データグリッドに値を追加するとユーザー インターフェイスに表示される列のラベルは変更できます。

- **ライセンスの再構成がサポートされない**

Enterprise ライセンスを使用して vRealize Automation を構成した後は、Advanced ライセンスが使用されるようにシステムを再構成することはできません。

- **vRealize Automation 8** では **Internet Explorer 11** がサポートされない

Internet Explorer 11 は vRealize Automation 8 で使用できません。

回避策：Internet Explorer 11 以外のブラウザを使用します。

- カスタム リソースが変更または削除された後に、ブループリント キャンバスが更新されない

カスタム リソースを削除しても、その変更はブループリント キャンバスにただちに反映されません。

キャンバスにはキャッシュ メカニズムがあり、検索ペインの横にある [更新] ボタンを使用して更新できます。

- vRO オブジェクト タイプが同一の異なるカスタム リソースの作成はサポートされない

vRA 7.x では、同じタイプの異なるカスタム リソースを作成できました。これにより、ユーザーは、同じ vRO タイプで作成/削除/操作アクションの異なるセットを、異なるカスタム リソース タイプの作成で定義することができました。vRA 8.1 では、異なるカスタム リソースから同じ vRO_Type を利用できるケースはサポートされていません。

- リファレンス タイプへの空の入力があると、カタログを使用して vRO ワークフローが実行されない

リファレンス タイプのワークフロー入力に対して、空の値で vRO ワークフローを申請すると、Null ポインタ例外が表示されます。

回避策：フィールドを必須にするか、またはリファレンス タイプのデフォルト値を設定します。

- プロビジョニングに失敗したカスタム リソースを展開から削除できない

カスタム リソースを申請すると、リソースを作成するワークフローの実行が失敗した場合でも、展開サービス内のリソースは作成されています。これは最初の申請に「開始済み」のステータスで応答し、展開にリソースを作成しているためです。このリソースには、vRO でのリソースのプロビジョニングに成功したときに追加されるメタデータが含まれていないため、削除できません。

回避策：カスタム リソースの削除を最初に試行した直後に、強制的に削除するかどうかを尋ねるダイアログが表示されます。[はい] を選択すると、カスタム リソースが強制的に削除されます。

- カスタム リソース名が展開ビュー リストに正しく反映されない

vRO_Type に基づいてカスタム リソースを作成する場合、通常は包括的な表示名を使用します。現在、この表示名は展開ビューでは使用できません。展開に表示されるリソースは、そのタイプによってのみ識別されます。

- **vCenter Server** マシンのコンソール ウィンドウからタイムゾーンを設定する場合に使用可能なオプション

vCenter Server マシンのコンソール ウィンドウからユーザーがタイムゾーンを設定したときに未定義の動作になります。

回避策：タイムゾーンは変更しないでください。

- テナント名で大文字と小文字が区別されない

vmware という名前のテナントと VMware という名前の別のテナントが同じテナントとして認識されます。

回避策：vRA 8.1 のテナントはホスト名に基づいているため、テナント名は大文字と小文字が区別されません。したがって、VMware という名前のテナントは VMWARE、vmware などの大文字と小文字の任意の組み合わせの名前のテナントと同じとみなされます。テナント名の大文字と小文字は異なる場合があるため、アプリケーション全体で保持されない場合があります。

- **OGNL 式による vRO ワークフローの表現が、vRA のカスタムの Day 2 操作で使用した際に適切にレンダリングされない**

表現に OGNL 制約を持つワークフローを含むカスタム リソース アクションが適切にレンダリングされず、一部の必須フィールドに値をポピュレートできないことがあります。

- **コスト/価格設定の機能が共有インフラストラクチャのマルチテナントで動作しない**

テナントがインフラストラクチャ リソースを共有できるマルチテナント展開に対して価格設定機能が構成されている場合は、報告される結果が正確でないことがあります。これは、価格設定機能がマルチテナントを認識していないためです。価格は、vROps が追加され、展開が作成された組織に対してのみ計算されます。

- **単一の vRealize Automation 7.x 環境から複数の vRealize Automation 8.2 組織への移行評価で、手動による証明書の受け入れが要求される**

この現象が発生するのは、単一の vRealize Automation 7.x 環境を複数の 8.2 組織に移行する際に、移行元の vRealize Automation 7.x 環境で安全でない SSL 証明書が構成されていた場合です。

回避策：詳細な手順と回避策については、[ナレッジベースの記事 KB81062](#) を参照してください。

- 評価サービスの **Swagger** を使用できない

評価サービスの **Swagger** ページを使用できません。

回避策：移行の **Swagger** ページにリストされている移行 API を使用して評価を実行します。

- **vSphere** クラスタで **DRS** が無効になっていると **vSphere/NSX-V** クラウドアカウントでの割り当て中に、既存のネットワークを使用した展開が失敗する

ネットワーク プロファイルで **NSX-V** ネットワークを選択し、既存のネットワークを使用する展開を申請すると、割り当て中に展開が失敗し、次のメッセージが表示されます。「コンピューティング...とネットワーク構成...に共通の配置が見つかりません」。これは、**DRS** が無効になっているクラスタが **vCenter Server** に含まれている場合に発生します。

回避策：クラスタで **DRS** を有効にし、クラスタが **vRA** クラウドゾーンに含まれるようにするか、ネットワーク プロファイルで **vSphere** ネットワークを選択してください。

- 特定の状況下で、ロードバランシングされたマシン クラスタのスケールインまたはスケールアウトが失敗し、意味不明のエラーメッセージが表示される

ロードバランシングされたマシン クラスタをスケールインまたはスケールアウトするときに、ロードバランサの「**loggingLevel**」プロパティまたは「**type**」プロパティの値が親 (IaC) ロードバランサのプロパティとは異なる場合、操作が失敗して次のメッセージが表示されます。

更新操作は一度に **1** つのプロパティに対してサポートされます

回避策：ブループリントのロードバランサから「**loggingLevel**」プロパティと「**type**」プロパティを削除して、スケール操作を実行してください。

- カスタム ロールを削除してもポリシーの詳細ページで [ロール] に空の値が表示される

カスタム ロールを削除した後に、ユーザーが既存の Day 2 ポリシーの詳細を表示すると、ロールが削除されたことを示すメッセージが表示されます。ただし、[ロール] の値が空になります。

- **移行した Amazon GovCloud アカウントでイメージの列挙に失敗する**

AWS GovCloud エンドポイントを vRA 7 から vRA 8.2 に移行した後、クラウドアカウントでイメージの列挙が失敗しているように表示されます。この問題は、クラウドアカウント画面のすべてのリージョンが選択されていることが原因で発生します。

回避策：移行後に、新しい AWS GovCloud アカウントに移動します。アカウントを編集し、リージョン全般の選択を解除します。GovCloud 関連のリージョンのみを選択したままにし、構成を保存します。その後、イメージの列挙は正常に実行されます。

- **Service Broker のフォームに、vRO ワークフローの入力で設定されたデフォルト値がポップアップされない**

vRO ワークフローで文字列の入力にデフォルト値が設定されている場合、Service Broker からワークフローを開始しても、申請フォームにデフォルト値が自動的に反映されません。

回避策：Service Broker のカスタム フォームを使用して、指定されたデフォルト値を設定してください。

- **Service Broker は、文字列フィールドの valueList にアクションが設定されている vRO ワークフローをインポートできない**

アクションによって値が入力される valueList を含む文字列フィールドのスキーマは、Service Broker では解析してインポートすることができません。

- **プロキシの背後にある Docker イメージをプルする場合に追加の構成が必要になる**

vRA 8.2 では、ABX サービスは、一般公開されているインターネットリポジトリからコンテナイメージをプルします。公開サイトへの送信トラフィックが許可されない隔離されたネットワークに vRA を展開した場合は、HTTP プロキシを構成する必要があります。vRA 8 では CLI を使用してプロキシ構成を有効にできますが、ワークフローには、Docker サービスの自動セットアップが組み込まれていません。

回避策：この構成は、個別に行う必要があります。ナレッジベースの記事は未定です。

- クラウドテンプレート申請フォームで **anyOf** 型の複合オブジェクトがサポートされない

フォームに複合オブジェクトの **anyOf** プロパティが含まれている場合、**anyOf** は、入力を検証する制約のセットではなく、文字列のドロップダウンとして表示されます。

回避策：**anyOf** 値ではなく列挙型を使用します。

- オブジェクト タイプ スキーマでプロパティが定義されていない場合、入力ダイアログで例外が発生する

入力プロパティがオブジェクト タイプで、プロパティが **json** スキーマで定義されていない場合は、ブループリントのテストまたは展開ダイアログで入力ダイアログがロードされません。

回避策：入力プロパティからデフォルト値を削除するか、入力プロパティのプロパティ スキーマをデフォルト値で定義します。修正は **8.2 P1** で利用可能になります。

- 入力配列フィールドを使用した展開時に値を送信できない

ユーザーは入力フォームの値を入力することができますが、ユーザー インターフェイスはテスト/展開ダイアログで **null** の配列をブループリント サービスに送信します。

回避策：オブジェクトまたは文字列/数値のフィールドを代わりに使用します。修正は **8.2 P1** で使用可能になります。

- **vRealize Orchestrator** または **vRealize Automation 8.2** にアップグレードすると、**vRealize Orchestrator** クライアントの一部のリソース要素が変更、または以前のバージョンに戻ったように見えることがあります。

vRealize Orchestrator または **vRealize Automation 8.2** にアップグレードすると、**vRealize Orchestrator** クライアントの一部のリソース要素が変更、または以前のバージョンに戻ったように見えることがあります。この問題は、過去に **vRealize Orchestrator** クライアント内で別のソース ファイルを使用して更新されたリソース要素で発生します。**vRealize Orchestrator** または **vRealize Automation** の展開をアップグレードした後、これらのリソース要素を以前のバージョンで置き換えることができます。これは断続的に発生する問題です。

回避策：

1.**vRealize Orchestrator** クライアントにログインします。

- 2.[アセット]>[リソース]の順に移動します。
- 3.この問題によって影響を受けるリソース要素を選択します。
- 4.[バージョン履歴] タブを選択し、要素を適切なバージョンに戻します。
- 5.影響を受けるすべてのリソース要素について、この手順を繰り返します。

- **New : vRealize Automation バージョン 8.2.0 Patch 1 のダウンロードが失敗する**

vRealize Automation 8.2.0 Patch 1 をオンラインでダウンロードすると、vRealize Automation パッチをホストする本番環境のコンテンツ配信ネットワーク (CDN) の問題が原因でダウンロードが失敗し、次のようなエラーが表示されることがあります。

LCMPATCHDOWNLOAD16001 パッチの処理に失敗しました

回避策：次の手順に従って vRealize Automation 8.2.0 Patch 1 をダウンロードします。他のパッチのダウンロードが進行中である場合は、それらを終了してからこの手順を実行します。

1. vRealize Suite Lifecycle Manager の /data/patches/temp/ フォルダにファイルがある場合は、すべて削除します。
2. vRealize Suite Lifecycle Manager で、[設定]>[バイナリ マッピング]>[パッチ バイナリ]の順に移動し、[オンラインでパッチを確認]を選択してパッチの更新をトリガします。
3. パッチのダウンロードに進みます。